

効果的な理学療法を実践するためには、その基盤となる理論や構造および思考過程を示したモデルの提示が必要である。

本特集では、理学療法モデルの意味を概観した後に、医学生物学的な側面のみならず社会学的な諸点を考慮したモデル作成の重要性について示した。また、科学的根拠に基づいた理学療法の実践と、帰納的な検証による帰結決定要因からみた理学療法モデルについて解説した。さらに、運動器疾患領域における理学療法実践モデルを提示し、理学療法教育モデルの実践と変遷についても言及した。

本特集を通して、実践的な理学療法モデルを共有し、いっそうの理学療法の啓発と発展の契機となることを期待している。

■「理学療法モデル」の意味（内山 靖論文）

モデルの意味を改めて明確にしたうえで、理学療法モデルの役割と効用について示した。さらに、その具体的な視点として、1) 標準化の推進、2) 国際生活機能分類との整合性、3) 機能的制限の扱い、4) 保健・医療・福祉の領域に見合うサブモデル、5) 疾患・病態別の思考過程の具体化について取り上げた。

■理学療法モデルの構築にあたって（日下隆一論文）

理学療法の対象は、疾病や障害にとどまらず健康をも含むものであり、これらに影響を及ぼす多様な要因に理学療法の介入がなされつつある。それは、医学を基礎としながらも現在の医学の領域を超える方向性を示唆するものであり、新しい理学療法モデルの構築といえるものである。これまでの医学モデルにおける治療モデルから、より多様なモデルへとその理論が論じられている。

■科学的根拠に基づく理学療法モデル（木村貞治論文）

医療における臨床的意思決定の根拠は、これまでの経験則中心型のモデルから、質の高い臨床試験の結果に基づく科学的根拠中心型のモデルへとパラダイムシフトが行われている。このような根拠に基づく医療（evidence-based medicine；EBM）の潮流は、わが国の理学療法分野にも導入され、根拠・実証に基づく理学療法（evidence-based physical therapy；EBPT）として、新たな臨床的意思決定モデルの概念的枠組みと具体的な実践方法の体系化が始まっている。本稿では、理学療法における臨床的意思決定の科学的モデルとしてのEBPTの概要と実践方法について概説する。

■帰結決定要因からみた理学療法モデルの構築（清水和彦，他論文）

理学療法（PT）モデルを考えるにあたって無視できない障害構造との関係をもとに、PT効果判定が障害の階層ごとに幅をもって行われる必要性、治療を合理的に行うための帰結測定と介入のシステムを測定するときの視点の違いを説いた。障害構造に従って行った構造方程式モデリングを紹介し、因果関係を考える必要があること、PTのデータの多くが質的データであり、質的データを今後カテゴリー化する必要を解説した。

■運動器疾患領域における理学療法実践モデル（福井 勉論文）

運動器疾患における理学療法の特徴は姿勢や動作を指標とした評価・治療ができることにある。有効な理学療法を確立するために、臨床家にはアウトカムとしての姿勢や動作を客観化して、トップダウン的に展開することによりモデルを構築する方法を提示する。また学生にはボトムアップ方式では各評価項目から4つの群に再構成し、おのおのの群の因果関係、相関関係を考慮して問題点を抽出するモデルを提示する。

■教育からみた理学療法モデルの意義と実際（嶋田智明，他論文）

21世紀を迎え、科学技術の進歩と社会的要請に合わせて、理学療法士の学習内容を吟味・精選すると共に知識を詰め込むことを中心に行われてきたこれまでの教授法から、問題解決能力を養う学生主体の学習方法に積極的に転換する必要性が強く迫られている。こうした点を踏まえ本稿では教育的側面から理学療法モデル、すなわちわが国の「理学療法教育モデル」の意義を歴史的変遷から述べると共に、その「教授実践モデル」やその評価法を紹介した。